まちの史跡めぐり

214

国会図書館所蔵資料の閲覧（10）

町文化財専門委員
石瀧 豊美

今回の情報は思わぬ所から飛び込んできました。

大西比呂志さんは今年3月まで神奈川県横浜市にあるフェリス女学院大学の国際交流学部教授を勤められ、今は名誉教授となっておられます。共通の人物に関心を持っているので、時折情報交換を行なっていました。その際、関東大震災の時に神奈川県知事だった安河内麻吉は須恵町出身なんですよ、と話のついでにお知らせしました。すると、次のような返事が返ってきました。安河内麻吉は興味深い人物で、小泉八雲と関わりがある、というのです。

小泉八雲はギリシャ出身で、元の名がラフカディオ・ハーン（ヘルンとも書きます）であることはよく知られています。1850年（嘉永3年）、アイルランド出身でイギリス軍軍医の父とギリシャ人の母との間に生まれました。1890年（明治23年）4月に来日し、「7月、アメリカ合衆国で知り合った服部一三（この当時は文部省普通学務局長）の斡旋で、島根県尋常中学校（現・島根県立松江北高等学校）と島根県尋常師範学校（現・島根大学）の英語教師に任じられる。」（ウィキペディア「小泉八雲」）とあります。偶然ですが、島根県尋常師範学校の後身、島根県師範学校は私の父が戦前、大学卒業後に最初に赴任した学校で、茶道の心得がないので松江では恥ずかしい思いをした、と語っていたのを思い出します。松江藩からは不昧の号で知られる、茶人として有名な藩主松平治郷が出ていて、城下町松江では今も茶道の伝統が脈々と伝えられているということです。

八雲が島根県の松江に住み、小泉節子と結婚したことで、日本国籍を取得した後の名、小泉八雲が誕生します。小泉は妻の姓、八雲は出雲の国の枕詞「八雲立つ」に因むとされています。松江市の市立文学館は小泉八雲記念館と名付けられていて、建物は小泉八雲旧居として国史跡に指定されています。

小泉八雲の作品では『怪談』（元は英文）が有名です。耳なし芳一、ろくろ首、のっぺらぼう、雪女など、誰もが知っている怪談や妖怪の類いが出てきます。

安河内麻吉と小泉八雲との間にどのような関係があるのか。大西さんのご教示を得ることにしました。その結果、国会図書館デジタルコレクションに行き着きましたので、その報告をすることとします。

『日本の面影』収録の「年譜」（田代三千稔訳、角川文庫、1958年）より。一部修正。

> 一八九一年（明治二十四年）
> 五月に【松江の】北堀町塩見縄手へ転居する。（略）十一月十五日に松江を出発して、熊本の第五高等中学（後の第五高等学校、現在の熊本大学）に転任する。手取本町三十四番地に寓居。嘉納治五郎、佐久間信恭等と知合いとなる。生徒中に村川堅固、黒板勝美、赤星典太、安河内麻吉、十時弥等がいる。
>
> 一八九二年（明治二十五年）
> 四月に博多および太宰府に遊ぶ。八月には博多、神戸、京都、奈良、門司、境（伯耆）、隠岐、美保の関、福山、尾道等を周遊する。（略）
>
> 一八九三年（明治二十六年）
> 四月に博多に行く。七月には長崎に遊び、三角を経て帰る。
>
> （略）

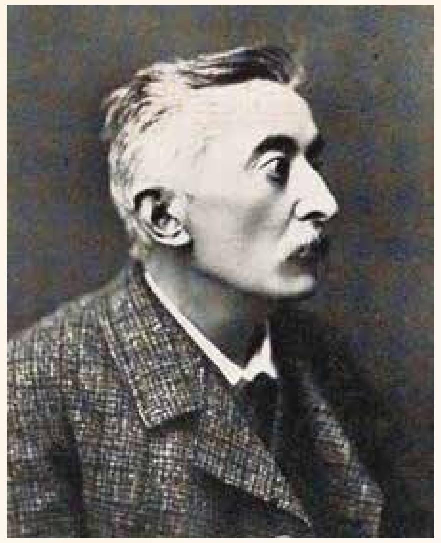
安河内麻吉の履歴は秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』（東京大学出版会、二〇〇二年）から判明します。略記された元号・年月を補正。一字分の空白は元のままです。

> 安河内甚平の二男　修猷館中学【中学修猷館が正しい】、五高一部法科卒（首席）を経て明治30年7月内務属・土木局治水課（略）　30年12月文官高等試験合格（略）　44年7月製鉄所次長【八幡製鉄所】　大正3年4月内務省警保局長　4年8月静岡県知事　7年5月広島県知事　8年4月福岡県知事　11年10月神奈川県知事　13年6月休職　13年7月依願免本官　昭和2年4月内務次官　2年7月死去

関東大震災は1923年（大正12年）9月1日。神奈川県、東京府（現在の東京都）が特に大きな被害を受けました。それが、安河内麻吉が神奈川県知事在任中の出来事でした。

五高をトップで卒業したとも書かれています。五高に教師として在籍した小泉八雲に、麻吉が強い印象を残したことは間違いないでしょう。「九州学生」という一文に五高の生徒との交際が書かれています（『小泉八雲新輯　日本の心』講談社、1949年）。文中の安河内が麻吉です。

> 或る日私は「西洋の甚だ強い道徳的の話」をといふ要求の出たので大分当惑した。



小泉八雲（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）

来年秋の朝ドラは小泉八雲の妻をモデルにした「ばけばけ」に決まったと、NHKが発表。

安河内麻吉が登場人物として期待できそうです。

> 私は不意にアーサー王の或る伝説を話してその効果をみようと決心した。（略）
>
> そこで私はサー・トマス・マローリーの「アーサーの死」の第十六節にあるサー・ボルスの話を彼らに物語つた（略）
>
> その批評を彼等は次のやうに与へた。（次々に生徒の意見が記録される。略）
>
> 安河内はいつた。
>
> 「この話の解釈は宗教的でなければならないと思ふ。変に思はれるが、しかしそれは私どもが西洋の思想を充分知らないからでせう。勿論知らない婦人を救ふために自分の弟を捨てることは私どもの理解してゐる正義と違つてゐます。しかしもしその武士が清い心の人であつたら、何かの約束か義務のためにさうしなければならないと思つたに相違ありません、それにしても、さうするのはよほど苦しい又恥づべきことのやうに思はれたに相違ありません。それで良心の命ずるところに反したことをしてゐると、感じないではゐられなかつたでせう」
>
> 私は答へた。
>
> 「それはまちがつてゐない。しかし又そういふことも知るべきである、即ちサー・ボルスが服従した情操は、西洋社会の勇敢たる又高尚なる人々の行を今日も支配してゐる情操である、又宗教的といふ言葉の普通の意味では、宗教的といへない人々の行為でもそれに支配されてゐるのである」
>
> （略）

具体的なやり取りの流れは省略しましたが、教師小泉八雲と生徒安河内麻吉の親密な関係は伝わるでしょう。次の文章は小泉八雲評伝の一節です。

> 学生のうちには隈本繁吉も村川堅固博士も黒板勝美博士もゐた。ヘルンがその手紙に於て最もその人物識見を賞讃して居るのは当時法科の首席故安河内麻吉（内務次官在職中昭和二年歿）であつた。『男のうちの男』と家人に噂してゐた。東京の家を訪問した時、取つぎの者それと知らずに断つて後、安河内なる事が分つてあと追ひかけさせて引きもどした事もあつた。（田部隆次「小泉八雲」、『小泉八雲全集別冊』第一書房、1937年、242ページ）

小泉八雲が安河内麻吉に宛てた手紙が全集に収録されています（『小泉八雲全集』第12巻、第一書房、1927年）。差し出したのは1901年（明治34年）11月、東京。

> 親愛なる安河内君、――御親切にも子息へお送り下された立派なお写真を拝見しての愉快のうち、あなたがどんなにか非常に健康で強壮であるやうに見えるかを認めての愉快はその最少なものではありませんでした。子息は固よりのこと御厚意に対して足らはぬ御礼を申し送りは致しますが――私にもあなたに感謝する光栄を有たせて下さい。
>
> あなたの九月三日のお手紙は非常に面白く拝見しました。この前に富久町の小宅をお訪ね下されてからこのかた、あなたのことを少しも聞かずに居たからであります。一例を挙げて申せば、あなたが熊本へお出でになつたことは知らずに居たのでした。（略）あなたがお送りになつた軍隊生活の経験は訓練として稍々辛いものであつたに相違ありません。が、要する所、あの数年の激烈な勉強と心的責任との後で、別なそして肉体的な訓練への変化は、健康の点からして善良なものであつたに相違無いと想ひます。あなたを一層強壮にしたことと思ひます。そしてあなたが砲兵隊に――永久的価値のある事を多く学び得る好機会のある砲兵隊に――居られたことを悦びます。然し日本が軍人の資格であなたの勤務を再び要する迄には、幾年の時間が経つことと信じて居ります。（略）
>
> 写真を送り下された御深切と、御身の上に就いての面白いお手紙とに対して、重ねて御礼を申し上ます。あらゆる幸運の御身のものたらんことを熱心に願ふて
>
> ワイ・コイヅミ

この手紙で書かれているように、1901年（明治34年）に、安河内麻吉が陸軍の砲兵隊で訓練を受けたという事実があるのかどうかが気になります。麻吉は9月3日に手紙を出してその写真（おそらくは軍服姿の写真）を八雲に送り、八雲は11月にその返事を書いたのでした。

1901年の官報で安河内麻吉の名を検索すると、4件の記事がヒットしますが、いずれも大阪府参事官としての活動や辞令で、軍隊生活に関連するものではありません。したがって、視察とか、短期間入営するなどの事実であったとしても認められません。

小泉八雲が安河内麻吉と誰かを混同しているとも考えられます。あるいは、私たちが知らないところで、1901年よりも前のどこかの時点で、砲兵隊と麻吉を関連付ける出来事が何かあったのかもしれません。今のところは疑問点としておきます。